

丹波の漆かき

丹波地方の漆かきには 1300 年以上の歴史があります。この地域は古くは漆で年貢を納めており、漆のこびり付いた土器が 7 世紀から 8 世紀にかけて墓地からも発掘されています。漆の採集技術は何世代にもわたって受け継がれてきましたが、技術の変化や世界経済の変化などにより、この貴重な技術は存続が危うくなっているのです。

漆は、漆の木の樹皮に切り込みをいれ、樹液が固まる前に取ることで採集されます。シーズンの初め、漆かき職人は地面と平行に切り込みをいれ、ヘラで樹液を掻き取りやすいように溝をつくります。この特徴的な切り込みは、前の切り込みの真上または真下に位置をずらし 4 日ごとに行われ、樹皮に一連の平行の切り込みが形成されていきます。できあがった漆の品質は、この工程の最初、途中、最後のいつ採取したかによって異なります。

丹波漆はその並外れた品質で知られています。この採集技術は非常に正確で、最終的に木が伐採されるまでに、それぞれの木から最大で約 200ml の漆を抽出することが可能です。その後、漆かき職人は挿し木して新しい木を繁殖させます。

最近の保全活動の一環として、この重要な文化遺産を守るためにやくの木と漆の館と丹波漆の NPO が設立されました。定期的に、経験豊富な漆かき職人が人々を森に連れて行き、将来の世代のために漆の技術を伝えているのです。